

研修報告書 No.9

所 属： 国立国際医療研究センター病院
氏 名： 石黒 勇輝
研修先： 医療法人白井会 田野病院
馬路村立馬路診療所

今回の地域医療研修を通じて、医学的な知識、技術の修練に加えて、地域医療、へき地医療の実情を身をもって経験することで、深い理解を得ることができたと感じる。

高知県の医療状況は、人口あたりの病床数は全国トップであるが、一方、老人ホームなどの高齢者向け施設数は全国下位となっている。実際に、私が訪れた特別養護老人ホームは満床であり、順番待ちの方が多数いるという状況であった。こうした施設不足に対して、本来急性期から回復期を担当すべき病院が、こうした需要の代替となってきた歴史もあると伺った。また、東部では救急病院も点在しているのみであり、1つの病院が受け入れ困難な場合には、少し離れたところまで搬送せざるを得ない。最適な医療施設の設置という点で改善の余地がある。また、全体的な人手不足も感じた。例えば、産婦人科医が周辺にはおらず、何かあったらかなり離れた大きい病院まで行かなければならないような状況にあると知った。医師に限らず、医療スタッフ全般が大都市と比べ不足している状態で、これが解決しない限り救急病院や介護施設を建設しようとしても不可能である。地域の人手不足を解決できる方法はあるだろうか。現在、専門医の取得という点で大都市圏に若手医師が集中してしまっている状況にある。指導医の数や症例数という点で大都市圏に勝つことは困難であるが、それ以外の点の魅力を重視する人もいるはずである。例えば、へき地の家庭医では、CTなども少し離れたところでないとは施行できないため、その適応についてより慎重に考慮せねばならない。都会の大病院と比べ、ある程度全般的に診療できる必要があり、総合診断力を高めるには地域の方が適している面もあると感じた。また、医師が少ないため、自分の影響が大きく、より責任感とやりがいを感じられるのではないかと思う。そして、海、山、川などの大自然は地域ならではのものであり、それらが好きな人にとっては、人生を豊かにできる。こうした点を重視する人が増えることで人手不足の解消に少しでも繋がるのではないかと考える。

今回の研修では、リハビリや訪問診療、訪問看護からデイサービスや老健施設などでも研修し、非常に多くのことを経験できた。地域包括ケアシステムの中で、普段の自分の病院はほんの一部でしかないことを身をもって実感できた。高知県は高齢者の割合は全国平均に比べて非常に高く、患者の平均年齢の高さを実感した。それ故、認知症や整形疾患が非常に多かった。また、併存疾患が多く、入院患者でも入院の要因となった単一の疾患を治療するだけでなく、多彩な合併症についても初めから考慮しなければならなかった。リハビリの研

修では、早期の退院、社会復帰に向けて、なるべく早期に開始する重要性を学べた。また、一人ひとりの状態や背景を考慮した目標設定やリハビリの工夫があることを実体験できた。家で再現できるような食事の形態にしたり、介助が必要ないように自助具の練習をしたりしているところを見学できた。訪問でいくつかの家屋へお邪魔し、生活環境を見ることができた。地域の特徴であると思うが、昔ながらの大きい家が多く、その分、段差が大きかったり、階段が狭かったり、必ずしも高齢者にとっては住みやすい状況にないことが分かった。これらに対して、退院前に自宅訪問し、手すりの設置が必要ないかなどを検討するソーシャル調整の重要性も学べた。

今回の研修では、医学的な知識だけでなく、医療スタッフの仕事内容も多く経験し、普段触れないような知見を得ることができた。多職種連携、コミュニケーションの重要性についても理解を深めた。今後は少子高齢化が進行し医療全体の環境も変わっていくであろう。高齢者が多い地域のなかで急性期から慢性期、在宅期までを研修できたことは、今後の医療に貢献していくにあたって、大変貴重で有意義な機会であった。病院の方々をはじめ今回の研修に携わってくださった関係者の皆様に感謝申し上げます。